言語研究 (*Gengo Kenkyu*) 73, 1～20

中部地方域の方言の打消過去表現について

江　端　義　夫

はじめに

中部地方域の方言に見られる打消過去表現の存立状況を明らかにすることが，本稿の目的である。

親しい近隣者に，「去年は海へ行きましたか。」と質問され，「去年は海へ行かなかった。」と返答することがある。その打消過去の表現形式を問題とし，諸事象の分布の実態について討究する。

本稿でとりあげる方言資料は，三種類にわたる。一つは，1976年3月から10月まで，私が中部地方域について，方言地理学的研究のために臨地調査して採録したものである。二つは，1966年から1968年まで，私が愛知県域について，方言地理学的研究のために臨地調査して採録したものである。三つは，1963年から1976年まで，私が各地で自然会話を断続的に調査して採録したものである。方言地理学のための老年層の被調査者は，原則として60才台の純粋土地っ子の女性である。少年層の被調査者は，少なくとも両親のうちの一方が純粋土地っ子で，しかも土地生れ，土地育ちの中学二年生女子であることを原則とした。中部地方域の調査では，少年層の調査地点が，老年層のに比べて少なすぎたので，以下の考察では，その少年層図を使用していない。

I　中部地方域での「行かなかった」の分布

1.　「イカナンダ」と「イカナカッタ」との分布境界域と，東西方言境界線

東西方言境界線については，思惟の基準の相違によって，諸説がある。その一つは，「越中，飛騨，美濃，三河の東境に沿ってその境界線を引き，この線以東を東部方言とし，以西を西部方言とする」ものである。これは，明治の国語調査

委員会『口語法調査報告書　上』(1906) の結論でもある。

明治の国語調査委員会の『口語法分布図』(1906) 第8図 "「なんだ」「なかった」等ノ分布図" では，「～ナンダ」と「～ナカッタ」との分布域の境界線が，上述の東西方言境界線よりも，やや東へ偏しているが，上の説を導き出すための重要な分布様相を示している。

さて，それより70年を経た1976年に，私が中部地方域を調査して作製した図1（中部地方域老年層）によって，「イカナンダ」と「イカナカッタ」との分布境界域は，『口語法分布図』のと酷似することが確認された。この事実によって，文法事項の一つ，打消過去表現の分布相は，かなり堅固なものであったと考えられよう。

しかし，図1を詳細に，『口語法分布図』のと比較検討してみると，事象分布相に，注目すべき変容が認められる。すなわち，「イカナカッタ」が山梨県の東部で勢力をのばしてきている。また，長野県，山梨県，静岡県において，「イカナンダ」と「イカナカッタ」との併存事態が顕著になっている。これらは，「イカナカッタ」の西進の勢いを示すものである（後述）。さらに，興味深いのは，図1での静岡県の駿河中心に見られる「イカナイッケ」「イカノッケ」などの分布である（後述）。これは，『口語法分布図』ではとりあげられなかったものである。

2. 「イカナンダ」の隆盛

図1では，一目瞭然と，「イカナンダ」の強力な分布が看取される。中部地方域は，総じて，「イカナンダ」の大勢力圏にある。ただし，関東と中部との接境域（静岡県・山梨県・長野県・新潟県）には，以下で考察するように，複雑な分布の動きが見られる。

3. 中部・関東接境域での「イカナンダ」

特に，中部・関東接境域たる静岡県・山梨県・長野県・新潟県について，「イカナンダ」の消長を考察する。

静岡県では，これが遠江に色濃くあるばかりで，駿河や伊豆では聞かれない。山梨県では，甲府盆地を中心にして，富士川流域の土地に，これがある。ところが，富士吉田・都留・大月などの相模川流域の土地，桂川・道志川流域の土地に

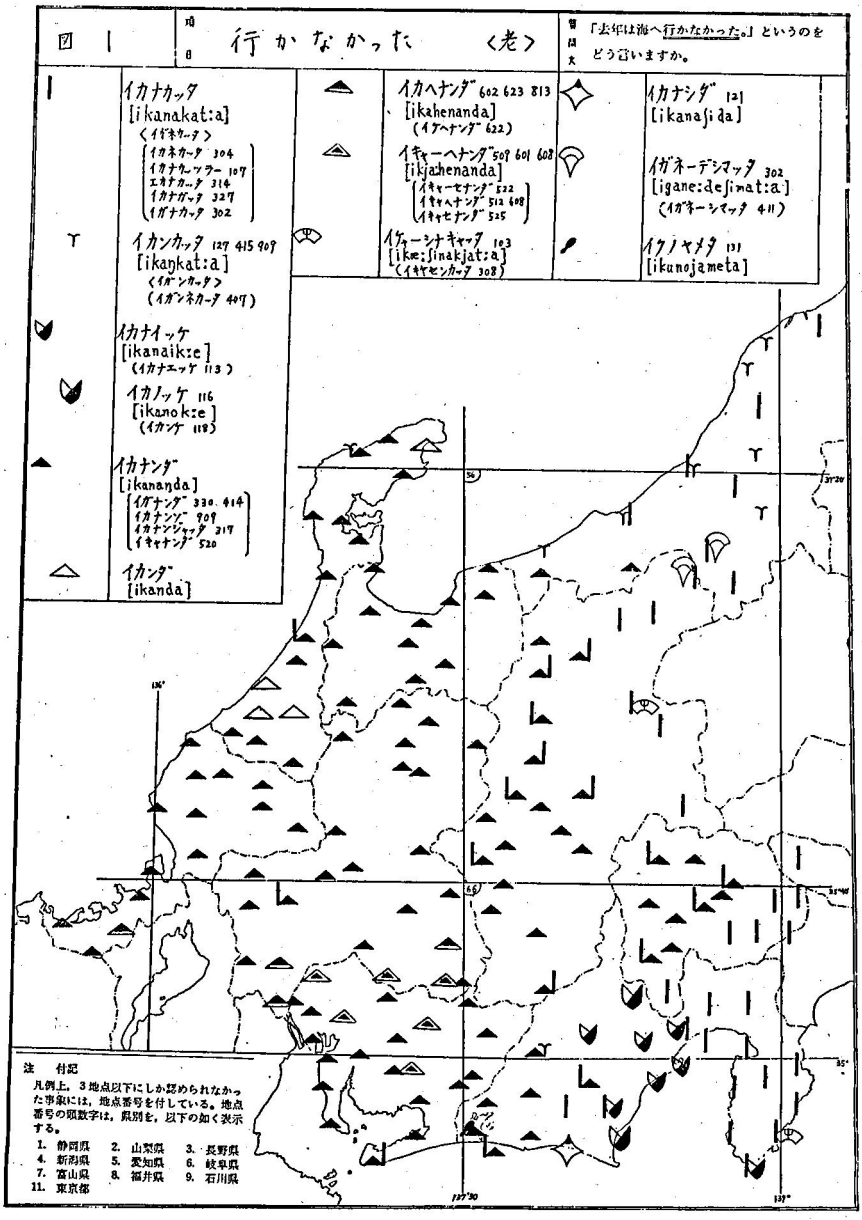


図 1
項目 行かなかった 〈老〉
質問文 「去年は海へ行かなかった。」というのをどう言いますか。
イカナカッタ
[ikanakat:a]
〈イガネカッタ〉
イカネカッタ 304
イカナカッラー 107
エカナカッタ 314
イカナガッタ 327
イガナカッタ 302
イカンカッタ 127 415 907
[ikaŋkat:a]
〈イガンカッタ〉
(イガンネカッタ 407)
イカナイッケ
[ikanaikɨ:e]
(イカナエッケ 113)
イカノッケ 116
[ikanokɨ:e]
(イカンケ 119)
イカナンダ
[ikananda]
イガナンダ 330. 414
イカナンゾ 909
イカナンジャッタ 317
イキャナンダ 520
イカンダ
[ikanda]
イカヘナンダ 602 623 813
[ikahenanda]
(イケヘナンダ 622)
イキャーヘナンダ 509 601 608
[ikjahenanda]
イキャーセナンダ 522
イキャヘナンダ 512 608
イキャセナンダ 525
イケーシナキャッタ 103
[ikɨ:jinakjat:a]
(イキヤセンカッタ 308)
イカナシダ 121
[ikanaʃida]
イガネーデシマッタ 302
[igane:deʃimat:a]
(イガネーシマッタ 411)
イクノヤメタ 131
[ikunojameta]
注 付記
凡例上，3地点以下にしか認められなかった事象には，地点番号を付している。地点番号の頭数字は，県別を，以下の如く表示する。
1. 静岡県 2. 山梨県 3. 長野県
4. 新潟県 5. 愛知県 6. 岐阜県
7. 富山県 8. 福井県 9. 石川県
11. 東京都

は，これが聞かれない。長野県では，千曲川流域の土地に，これが存しない。新潟県では，上越地方の信州に近い地域で，これが少しく聞かれるだけである。このような中部・関東接境域における「イカナンダ」の分布状況は，私どもに諸事象の交渉葛藤の事態を想像させる。

そこで私は，一地点に複数の事象が存立している状態を分析してみることにした。中部地方域の「行かなかった」に関して，一地点に併存する複数事象の実相は，以下のとおりである。(「イカナンダ」に実線の下線を施し，「イカナカッタ」に破線を施す。)

	複数事象の併存地点数	併存事象
福井県	0	
富山県	0	
石川県	2	1{イカナカッタ / イカナンダ}　1{イカンカッタ / イカナンダ}
岐阜県	2	1{イカナカッタ / イカナンダ}　1{イキャーヘナンダ / イカナンダ}
愛知県	2	1{イカナカッタ / イカナンダ}　1{イキャヘナンダ / イカナンダ}
静岡県	8	2{イカナカッタ / イカナンダ}　1{イカナンダ / イカンカッタ}　3{イカナカッタ / イカナイッケ} 1{イカナカッタ / イケャーシナキャッタ}　1{イクノヤメタ / イカナンダ}
山梨県	4	4{イカナカッタ / イカナンダ}
長野県	10	8{イカナカッタ / イカナンダ}　1{イカナカッタ / イキヤセンカッタ}　1{イガネーデシマッタ / イカナカッタ}
新潟県	3	2{イカナカッタ / イカンカッタ}　1{イカナカッタ / イガネーシマッタ}
合　計	31	

一地に複数事象が併存している地点の総数は，31である。また，「イカナンダ」とその他の事象との併存は，22地点である。それが，長野・山梨・静岡の3県に圧倒的に多い。しかも，併存の相手である他の事象は，おもに共通語形の「イカナカッタ」である。

	「イカナンダ」と他事象との併存地点数		「イカナンダ」と「イカナカッタ」との併存地点数	
石川県	2地点（9％）		1地点	
岐阜県	2 〃 （9％）		1 〃	
愛知県	2 〃 （9％）		1 〃	
静岡県	4 〃 （18％）	16 地点（73％）	2 〃	14 地点
山梨県	4 〃 （18％）		4 〃	
長野県	8 〃 （37％）		8 〃	
合計	22 〃 （100％）		17 〃	

上記3県における「イカナンダ」と「イカナカッタ」との併存地点数14は，3県における複数事象の併存地点の総数22の64％におよぶ。かくて，本3県（長県・山梨県・静岡県）では，打消過去表現において，おもに，「イカナカッタ」と「イカナンダ」との二重表現生活が行なわれている事実が明らかにされた。

つぎに，二事象の相関について考察する。私は，図1における複数事象の併存の押印法を，『瀬戸内海言語図巻』のと同様に，“頻用される事象”“最初に答えられた事象”を先行させ，1 ✳ 2（7 3 5／8 4 6）の順序で，符号を施している。図1の「イカナンダ」と「イカナカッタ」との併存の17例について，盛稀関係を整理すると，つぎのようになる。

A　「イカナンダ」が頻用され（または，最初の返答事象であり），「イカナカッタ」はそれにつぐものである。……6例（35.3％）

B　「イカナカッタ」が頻用され（または，最初の返答事象であり），「イカナンダ」はそれにつぐものである。……11例（64.7％）

「イカナカッタ」が，「イカナンダ」の2倍近い優勢を示している。ゆえに，中部・関東接境域においては，「イカナカッタ」の強力な分布が，「イカナンダ」の分布を浸蝕し，覆い包もうとしている状況が確認される。

4. 特異な存立の「イカナイッケ」

文末に「ケ」を添加させた「イカナイッケ」が，打消過去の表現を形成する。文末の「ケ」についての理論的な部面の発表が，山口幸洋氏によってなされている[1]。私は，私が臨地調査して得た「～ケ」について，実際の分布を中心に考察したいと思う。

「イカナイッケ」は，駿河に分布の中心があり，伊豆南端の一地にもこれがある。中部地方域全体を眺望すれば，これは，必ずしも広域隆盛な分布事象だとは言えない。静岡県内でも，「イカナイッケ」は，東部の伊豆周辺域の「イカナカッタ」と，西部の遠江以西に優勢な「イカナンダ」とにはさまれていて，中間地域での孤立分布性が明らかである。

「イカナイッケ」の分布地点（静岡県賀茂郡南伊豆大瀬，島田市元島田，榛原郡本川根町田代，静岡市中沢，静岡市西島，清水市三保）。「イカナエッケ」の分布地点（清水市小河内字中里）。「イカノッケ」の分布地点（清水市梅ケ島）。「イカンケ」の分布地点（榛原郡榛原町静波）。

静岡市梅ケ島に，「イカノッケ」がある。否定表現を「ノッ」とするのは，静岡県榛原郡本川根町田代・山梨県南巨摩郡早川町奈良田などの「イカノー」[2]における「ノー」と似ている。いわば県境域や辺地にこれがある。

ここに，「イカナイッケ」諸事象の，新古盛稀に関する，被調査者の説明がある。静岡県賀茂郡南伊豆町大瀬で，「イカナイッケ」について，《たまに使うことば。》とある。また，清水市小河内字中里で，「イカナエッケ」について，《古風なことば。》との注釈が得られている。したがって，文末に「ケ」を添加せしめた打消過去表現の古態孤立性が，ここでも認められた。

5. 北陸域での新形「イカンダ」

「行かなかった」の意で表現される「イカンダ」は，まさに，簡潔な表現の姿である。これは，言語主体の想念をきっぱりと表明した心性を持つ。臨地調査で，私は，石川県4地点（加賀3地点，能登1地点）において，これを採録しえた。

「イカンダ」の分布地点（石川県珠洲市飯田町，石川郡鳥越村字別宮，小松

1) 山口幸洋「静岡県方言の過去表現」『国語学』75集 1968

2) 清水茂夫「奈良田ことばの語法」『奈良田の方言—甲斐民俗叢書3』1957

市金平町，石川郡美川町神幸町西）

私は，「イカンダ」の成立について，以下のように考える。「イカンダ」は，「イカナンダ」が「イカンダ」へと変化したものであろう。「イカンダ」の分布は，能登の先端と加賀の南部域とに存する。これは，すでに早く，近畿から「イカナンダ」が伝播し，定着しきった北陸で，ika$\boxed{\text{nan}}$da > ika$\boxed{\text{n}}$da への簡略化現象によって成立したものと解される。「イカナンダ」の古い地盤の土地で，「イカナンダ」が，それと交替すべき改新事象がない時，その土地で，「イカンダ」への自己改新を起したものとされよう。「イカンダ」は新しい勢力と見なされる。

ところが，「書かンダ」について，楳垣実氏は，『近畿方言の総合的研究』（三省堂　1962）の137ページで，次のように，終止形に「ダ」が接続したものと認めていられる。

書かンダ　見ヤンダ　書かヘンダ　見ヤヘンダ（三重）

これは「ナ」が落ちたというだけでは完全な説明と言えないような気がするから，終止形に「だ」が接続すると認めたほうがよいのかもしれない。そうだとすると，「そうでもねえだよ」という関東風の表現と一致する近畿では珍しい用法だ。もちろん近畿にもこんな用法の片鱗はみられて，丹後には「有るだか」があり，紀州には多少違うが，「有るわだ」「無いわだ」がある。外近畿方言文法の三幅対というべきか。

氏の見解には，多少の無理があるかと思われる。その理由は以下のとおりである。

石川県で聞かれる「イカンダ」は，打消の過去時制を表現するものである。ところが，楳垣氏の掲出された実例を見ると，丹後の「有るだか」は，指定助動詞「ダ」の文末詞化現象であり，紀州の「有るわだ」，「無いわだ」は，感声的文末詞「ワダ」であると解される。これらは，考察すべき次元がちがうと考えるべきであろう。

また，三重県沿岸では，北陸の「イカンダ」と同じ用法と見られる事象が，つぎのように聞かれる。

○セッカク　イッタノニ　アカンダ。　　せっかく行ったのに，だめだった。

（老女）1967　津市神戸西町

○ダレモ　オランダ。　　誰もいなかった。（老女）　1967　津市神戸西町

○イキセンダ。　（去年は海へ）行かなかった。（老女）1967　伊勢市鹿海町《イカヘンダは，他所から来た人のことば。》

○ダーレモ　オイセンダ。　（せっかく行ったのに）誰もいなかった。（老女）1967　伊勢市鹿海町

○ソンナ　ジブンワ　ナー。　ソノー　アノ　ロクガツン　ナルト　モー　トレマセンダ　ワ。　昔の漁業のころはね。そのう，あのう，六月になると，もう（あなごは）採れませんでしたわ。（老女）1970　鈴鹿市北若松中浜田

「イカナンダ」が，すべて，この三重県沿岸で「イカンダ」に変ってしまったのではない。「イカナンダ」の共通地盤の上に，「イカンダ」を載冠した地点と，それをまだ持たない地点とがあるのである。たとえば，愛知県に近い桑名市赤須賀では，

○セッカク　イッタノニ　オラナンダ。　せっかく行ったのに，（誰も）いなかった。（老女）1967

○キョネンワ　ヨー　イカナンダ。　去年は，行かれなかった。（老女）

「～ナンダ」は聞かれるが，「～ンダ」は聞かれない。離島の神島でも，

○サンネングライ　コナンダ。　（東京へ送った島の重要文化財が）三年間ぐらい，返送されてこなかった。（老男）1967

のように，「～ナンダ」が聞かれるきりである。他方，三重県沿岸をもう少し南下してゆくと，「～ナンダ」と「～ンダ」とが共用されている。先の鈴鹿市鹿海町での「～ナンダ」の例をあげれば，つぎのとおりである。

○アッテモ　シラナンダデス　ネヤ。　（昔は，稲の病気が）あっても，知らなかったんですのよ。（老女）1967　伊勢市鹿海町

○アメガ　フラナンダンデ　イカナンダ。　雨が降らなかったから，困り果てた。（老女）1967　伊勢市鹿海町

以上の論証によって，「書かンダ」「行かンダ」の「ダ」は，楳垣実氏の言われるような，“終止形に「ダ」が接続したもの”でないことが知られよう。つまり，「～ナンダ」の「ナ」が脱落して，「～ンダ」が生成したのであった。北陸での「～ンダ」と三重県沿岸域でのそれとは，同一の形成過程を経た同じものと解することが許されよう。

図 2 聞かなかった（『東海方言語図集』より）概括図

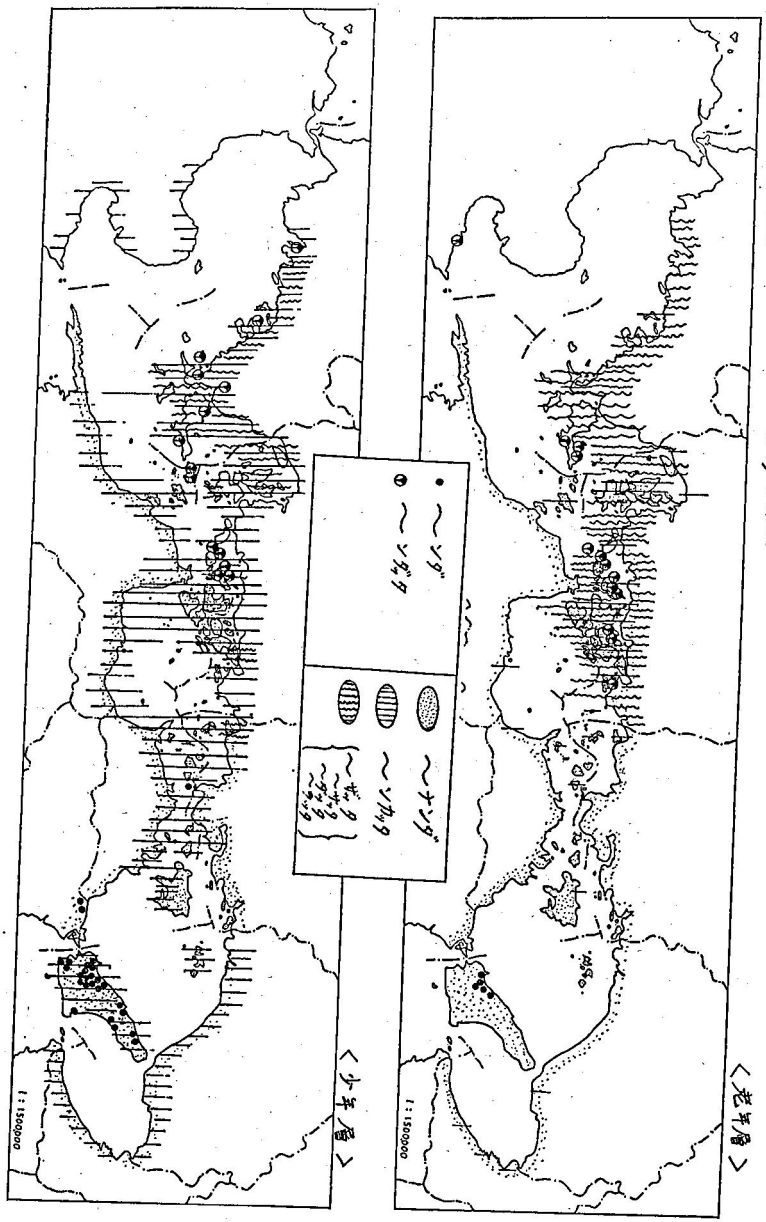
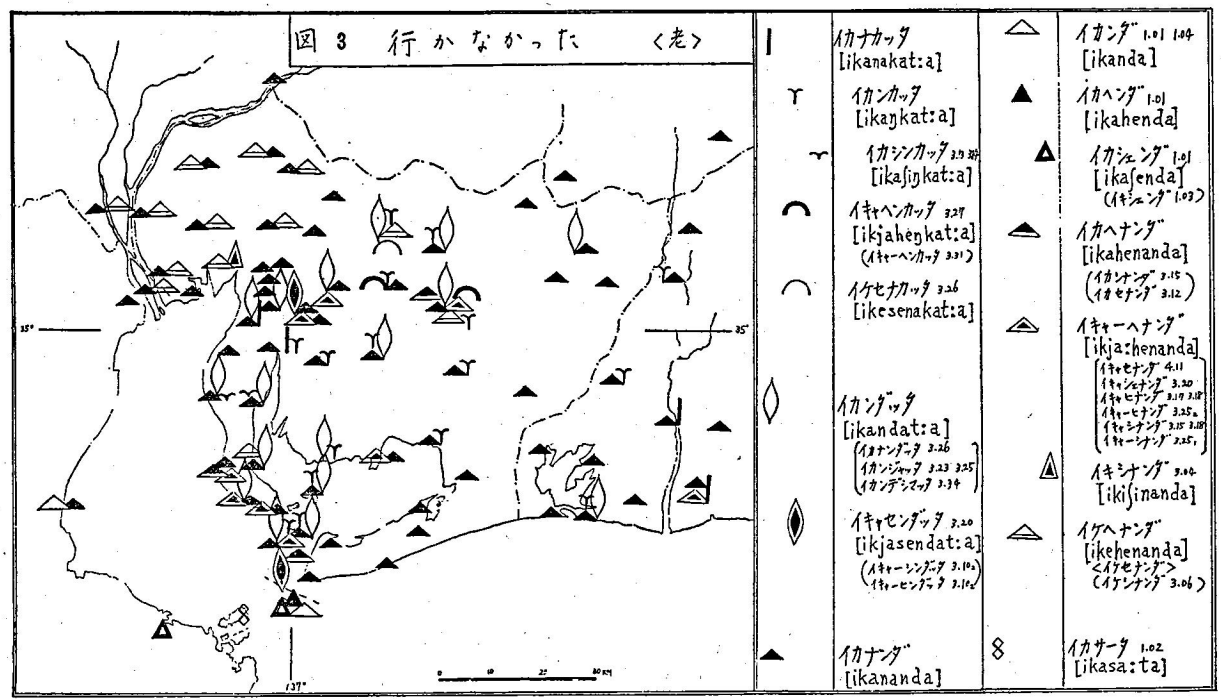


図 3　行かなかった　〈老〉


35°
35°
137°
0 10 20 30 km
イカナカッタ
[ikanakat:a]
イカンカッタ
[ikaŋkat:a]
イカシンカッタ 2.29 3.01
[ikaʃinkat:a]
イキャヘンカッタ 3.27
[ikjahenkat:a]
(イキャーヘンカッタ 3.31)
イケセナカッタ 3.26
[ikesenakat:a]
イカンダッタ
[ikandat:a]
(イカナンダッタ 3.26
イカンジャッタ 3.23 3.25
イカンデシタッタ 3.34)
イキャセンダッタ 3.20
[ikjasendat:a]
(イキャーシンダッタ 3.10
イキャーセンダッタ 3.10)
イカナンダ
[ikananda]
イカンダ 1.01 1.04
[ikanda]
イカヘンダ 1.01
[ikahenda]
イカシェンダ 1.01
[ikaʃenda]
(イキシェンダ 1.03)
イカヘナンダ
[ikahenanda]
(イカヘンダ 3.15
イカセナンダ 3.12)
イキャーヘナンダ
[ikja:henanda]
(イキャセナンダ 4.11
イキャシェナンダ 3.20
イキャヒナンダ 3.19 3.18
イキャーヒナンダ 3.25
イキャシナンダ 3.15 3.18
イキャーシナンダ 3.25)
イキシナンダ 3.04
[ikiʃinanda]
イケヘナンダ
[ikehenanda]
<イケセナンダ>
(イケシナンダ 3.06)
イカサータ 1.02
[ikasa:ta]

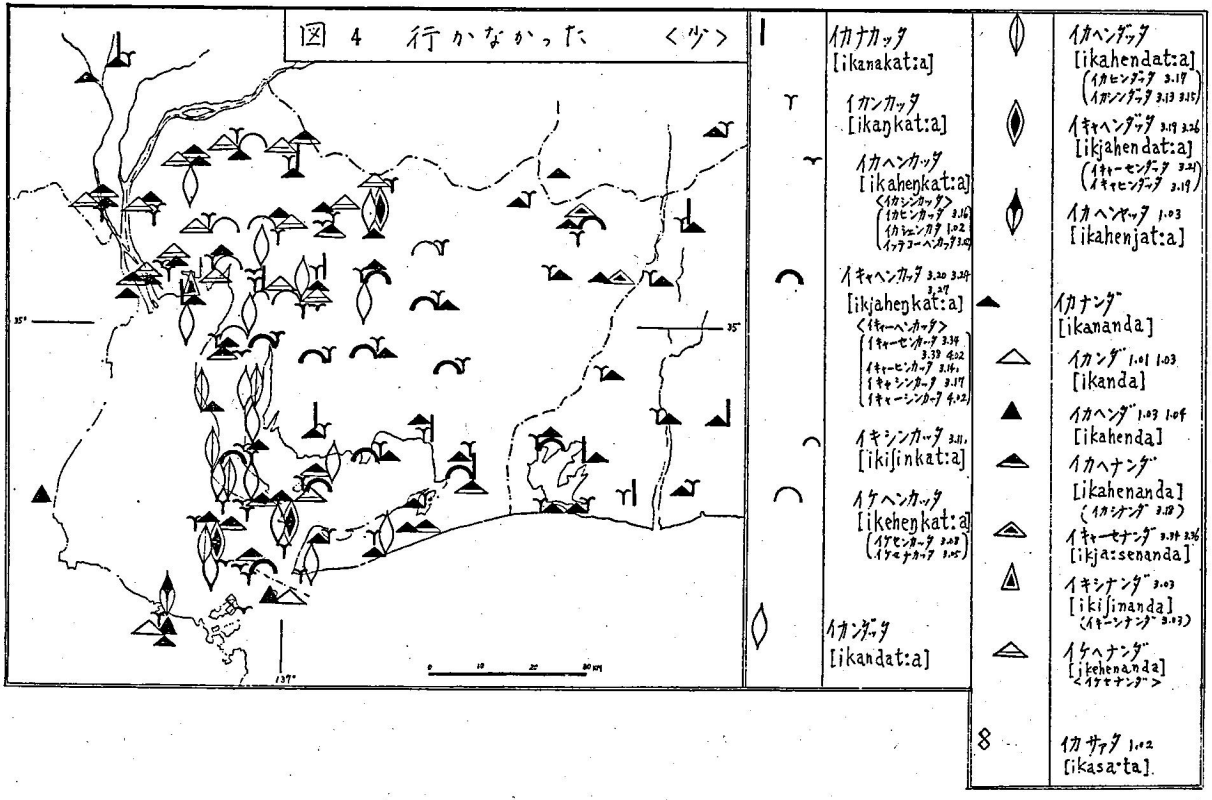
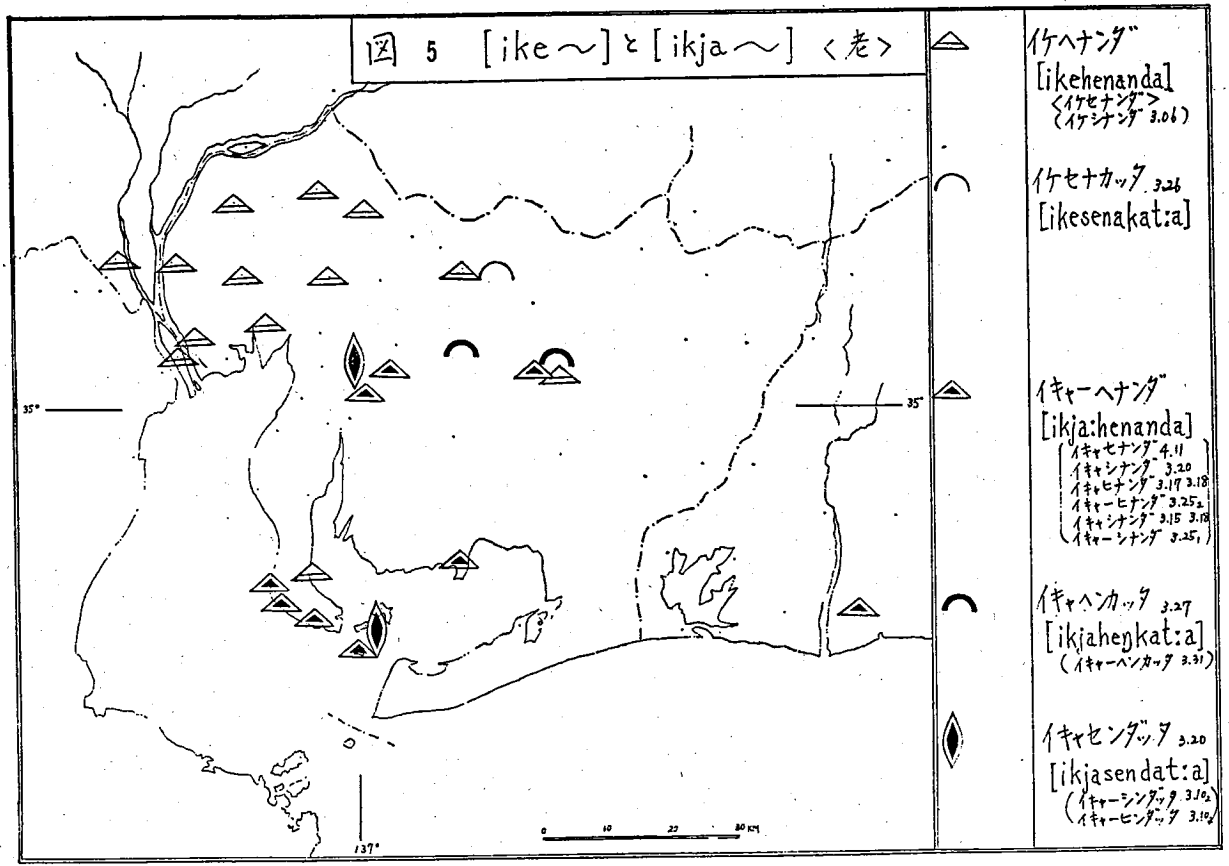


図 4 行かなかった <ッ>
イカナカッタ
[ikanakat:a]
イカンカッタ
[ikaŋkat:a]
イカヘンカッタ
[ikahenkat:a]
<イカシンカッタ>
イキャヘンカッタ
[ikjahenkat:a]
<イキャーヘンカッタ>
イキシンカッタ
[ikiʃinkat:a]
イケヘンカッタ
[ikehenkat:a]
イカンダッタ
[ikandat:a]
イカヘンダッタ
[ikahendat:a]
イキャヘンダッタ
[ikjahendat:a]
イカヘンヤッタ
[ikahenjat:a]
イカナンダ
[ikananda]
イカンダ
[ikanda]
イカヘンダ
[ikahenda]
イカヘナンダ
[ikahenanda]
イキャーセナンダ
[ikja:senanda]
イキシナンダ
[ikiʃinanda]
イケヘナンダ
[ikehenanda]
イカサッタ
[ikasa:ta]
35°
137°

図 5 [ike～]と[ikja～] 〈老〉



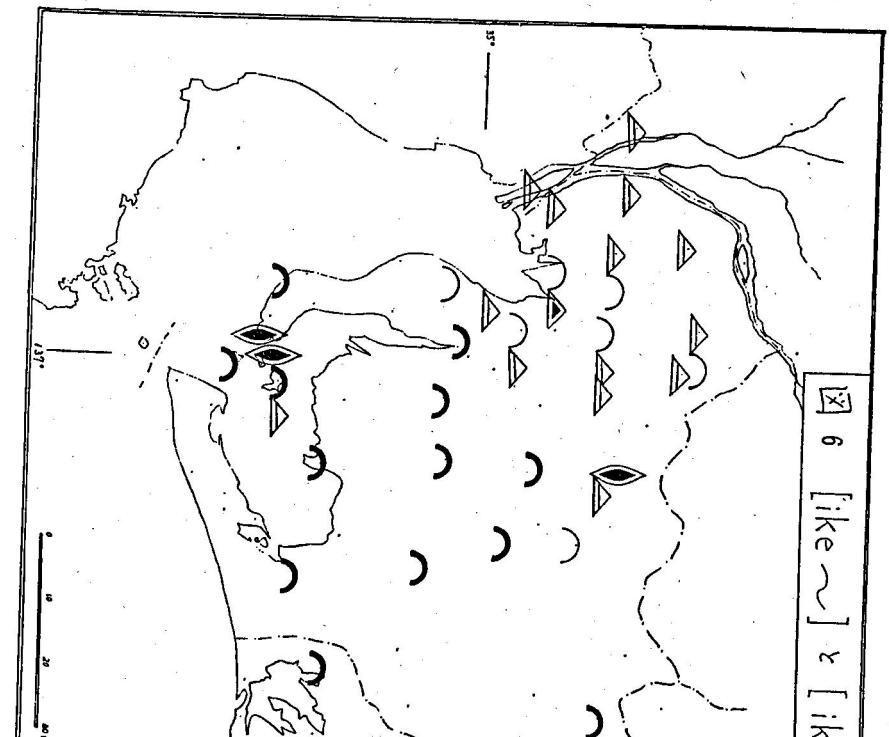


図6　[ike～]と[ikja～]〈少〉

イケヘナンダ
[ikehenanda]
〈イケセナンダ〉

イケヘンカッタ
[ikehen kat:a]
（イケセンカッタ 2.08
イケセナカッタ 3.05）

イキャーセナンダ 3.34 3.86
[ikja:senanda]

イキャヘンカッタ
[ikjahen kat:a]
〈イキャーヘンカッタ〉
（イキャーセンカッタ 3.34 3.38
4.02
イキャーヒンカッタ 3.14
イキャシンカッタ 3.17
イキャーシンカッタ 4.12）

イキャヘンダッタ 3.19 3.26
[ikjahendat:a]
（イキャーセンダッタ 3.41
イキャヒンダッタ 3.19）

奥村三雄氏は，「近畿方言の区画」（『日本の方言区画』1964　東京堂）において，大和南部を除く中近畿式方言を醸成する事象として，「過去否定法書かンダ」をあげていられる。「書かンダ」は，じつに，近畿の中核部で新生したものと解されるものでもある。

さて，「書かンダ」などの新しさは，『瀬戸内海言語図巻』にもたどられる。図2のように，「聞ケヘンダ」の分布が，老年層図で，淡路島の5地点だけに見られるのに，少年層図では，「聞カンダ」が淡路島で，23地点に見られる。しかも，隣接する四国の徳島県にも，これが伝播している。「聞かナンダ」の強力な分布領域の中で，「聞かンダ」が創生したことが知られる。また，「聞かンダ」の新勢力が，漸次西方へ伸びて行こうとしている動向も看取される。

II　愛知県域の方言における「行かなかった」の現実と動態

図1では，近畿圏に近い尾張・美濃に，「イキャーヘナンダ，イキャヘナンダ，イキャーセナンダ，イキャセナンダ，イケヘナンダ」などの分布がある。「イカナンダ」「イカナカッタ」などの，直截的な打消過去の発想に対し，これらは，婉曲的発想の表現法と言うべきか。

打消過去表現に見られる諸言語形式相互の接触と対立とを，愛知県域について考察してみる。

併存事象の出現量に，中部域の（図1）と愛知県域の（図3，4，5，6）とで，大差が見られる。これは，調査法に関わることである。愛知県域においては，質問文の読みに続けて，予想される表現形式を尽くしてその使用の有無を問い正している。中部地方域においては，質問文の読みをくり返すにとどまった。

1.　老・少年層ともに「イカナンダ」が全盛

近畿圏に盛んな「イカナンダ」が，図3（愛知県域老年層）で見られるように，当該域でも，隆盛な分布を示す。

図4における，少年層での「イカナンダ」の分布輪郭は，老年層でのとほとんど同じである。わずかに「イカナンダ」の分布濃度が低くなっているが，一定の方向に減少傾向を示しているわけではない。じつに，老・少年層間での，50年の隔たりを

もってしても，愛知県域での「イカナンダ」には，分布の著しい衰退が見られない。

2.　「イカナカッタ」から「イカンカッタ」へ

共通語の「イカナカッタ」は，図3で，わずか4地点に認められるだけである。老年層において，知多・三河・西遠江では，変化形「イカンカッタ」が見出される。ika[na]katta > ika[n]katta の変化は，こんにち，新しい傾向である。

図4の少年層図で，第一に注目されるのは，「イカナカッタ」が，老年層図のと比べて，3倍の12地点にも増えていることである。これを共通語としてとり入れたのであろう。少年層図で，「イカナカッタ」が，東海道に沿って東西に帯状に分布している。そして，この幹線から北部の方へと分布を広げつつある状況が読みとられる。

第二に，「イカンカッタ」は，老年層図で18地点にしか分布していなかったが，少年層図では，53地点にも増えている。その分布濃度は，老年層の約3倍である。しかも，その分布域は，当該域全部を覆っている。

第三に，「イカンカッタ」の使用を，私に教示する少年者の態度に，若干の戸惑いが認められた。少年層者の教示に，“ゆれ”があったことを，ここに記しておく。私は，調査時に，次のように注記をしている。

《「イカンカッタ」を，初め，言わないと答え，後，言うと答えた。》　愛知県海部郡甚目寺町

《「イカンカッタ」を答えるとき，自信なさそうであった。》　岐阜県本巣郡糸貫町

《“「イカンカッタ」は，使うが，稀である。”と答えた。》　愛知県知多郡南知多町師崎，および篠島

《「イカンカッタ」を，初め，言うと答え，後，言わないと訂正した。》　愛知県渥美郡田原町萱町

「イカンカッタ」の浸潤が，少年層へ行なわれる過渡的状況を，これらの注記事項で解することができようか。しかし，「イカンカッタ」の，少年層での流布力は，絶大である。

図2「聞かなかった」（『瀬戸内海言語図巻』より）における少年層図での「キカンカッタ」を見ると，瀬戸内海域に全域的な分布が認められる。中国地方を特

色づける「キカザッタ」「キカダッタ」などの，老年層図で見られた事象は，少年層図でことごとく消えて，「キカンカッタ」にとってかわっている。「～ンカッタ」の隆盛は，全国的に注目されよう。

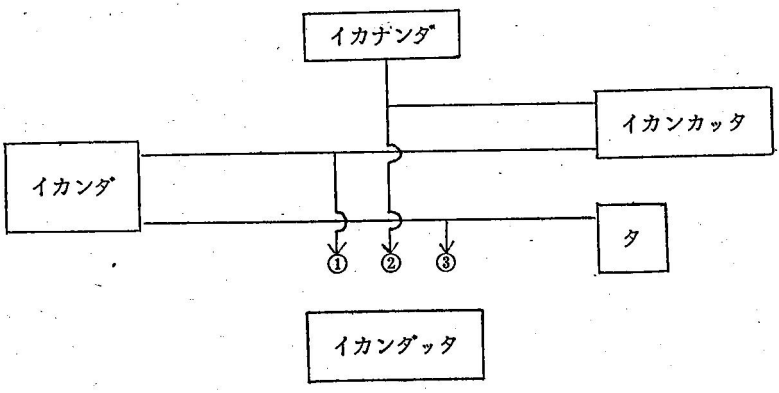
3. 創生形「イカンダッタ」の伸展

「イカンダッタ」は，中部地方域の図1では見られない。

図3によると，愛知県域老年層における「イカンダッタ」は，知多半島，三島嶼（日間賀島・佐久島・篠島）および岡崎以西の西三河に分布している。舞阪に飛地的分布があるけれども，その他の東三河以東，名古屋周辺域には，「イカンダッタ」は認められない。仮りに，愛知県を東，中，西の三つに分ければ，この事象は，その真中の部分に中心をもつことが，明らかである。

さらに興味深いのは，少年層の図4において，この「イカンダッタが，愛知県の中部域，とくに知多半島を中核部として，西北へ，また南へと分布の輪郭を広めつつある事実である。「イカンダッタ」は，渥美半島の先端部，濃尾平野の外周域，三重県側にも伝播している。

さて，「イカンダッタ」は，どのようにして生成したのであろうか。私は，三つの道があったと考える。



一つは，「イカンダ」（三重県側）が，「イカンカッタ」を刺激し，両者が混淆をおこし，「イカンダッタ」を創生したと考える道である。ikada + ikanka tta = ikandatta　篠島における「イキャセンダッタ」は，それを裏付ける好事例であろう。

他の一つは，「イカナンダ」と「イカンカッタ」との混淆による創生と考える道である。私は，老年層において，「イカナンダ」と「イカンカッタ」とが盛んな愛知県西加茂郡藤岡村で，「イカナンダッタ」を採録している。これを手がかりにすれば，「イカナンダ」＋「イカンカッタ」＝「イカナンダッタ」＞「イカンダッタ」という変化過程がありえたと考えられよう。

最後の一つは，「イカナンダ」から変化した「イカンダ」が，過去の意識が薄くなったため，助動詞「タ」を累加せしめて，「イカンダッタ」を生成したと考える道である。①と②と③とのそれぞれの道がありえて，盛んな「イカンダッタ」が創生せしめられたとするのが，適当な考え方であろう。

さて，少年者は，老年者の「イカンダッタ」を受容しつつ，かつ，それを変形させて，新しい表現形式を創造している点が注目される。それらは，つぎのとおりである。

「イカヘンダッタ」「イカヒンダッタ」「イカシンダッタ」，「イキャヘンダッタ」「イキャーセンダッタ」「イキャヒンダッタ」，「イカヘンヤッタ」

これらは，新しく，創生されたものである。語感の新鮮さ，新奇さ，婉曲さのゆえにか，想像以上の伝播力を包蔵しているようである。

ところで，図2の『瀬戸内海言語図巻』によると，老年層図では，瀬戸内海の広島県，山口県島嶼を中心に，13地点に「キカンダッタ」が見られる。少年層図にも，14地点にこれがあり，分布領域が老年層図のより多少西にずれている程度で，拡大も縮少もしていない。瀬戸内海での「キカンダッタ」は，「キカザッタ」「キカダッタ」からの「ン」音挿入によって生じたものである。したがって，愛知県域でのイカンダッタとは，言語形式は同一であっても，出自が異なる。ために，瀬戸内海域でのそれは，分布凍結状況であるのに対し，愛知県域では，分布がふえつづけているという状況である。

4.　隆盛な「イキャヘンカッタ」と停滞の「イケヘンカッタ」

愛知県の文化・政治・経済などの中心である名古屋市およびその周辺域について，その方言状態を考えてみたい。

図5の老年層図と図6の少年層図とを比較すると，二つの点が注目される。一つに，図5の老年層図において，名古屋文化のすぐにも及ぶ濃尾平野域に，「行

ka なかった」などの，動詞未然形活用のア段音を，「行 ke ～」のように，エ段音に転じて表現する傾向がある。図6の少年層図においても，[ike ～]（「イケヘンカッタ」など）の事象がふえている。エ段音好みの名古屋方言的な特質を，少年層者が受容してもいるのである。

二つに，[ikja ～]（「イキャーヘンカッタ」など）という拗音の入った婉曲の打消表現形式が，少年層において，三河，知多の全域で，非常に盛んに流布したことが，注目される。この表現は，尾張北部に見えない。尾張北部的な[ike ～]と，三河・知多的な[ikja ～]とは，今日状況で，さらに新しい対立を見せようとしている。少年層者の[ikja ～]の力は，相当に大きいと考えられる。西三河に分布の中心を持つ[ikja ～]は，東へは，県境をこえて浜名湖まで到達している。

以上の考察を通して帰結された主要な点はつぎのようにまとめられる。

まとめ

(1)「イカナンダ」と「イカナカッタ」との分布境界域は，東西方言境界線の一つ（越中，飛騨，美濃，三河の東境に沿う）より，やや東に偏したものであり，1906年の『口語法分布図』以来70年間，ほとんど変容していない。文法事項としての打消過去表現の不易性は，かなり堅固なものであったと考えられよう。

(2)中部・関東接境域（静岡県，山梨県，長野県）においては，「イカナンダ」と「イカナカッタ」との併存が顕著であり，しかも，「イカナカッタ」のほうが優勢である。また，山梨県東部には，こんにち，「イカナンダ」の分布は認められない。

(3)「イカナイッケ」などの，文末に「ケ」のつく現象は，静岡県中部域の特色であり，古態遺存の様相を呈する。

(4)「イカンダ」は，「イカナンダ」から変化した新しい事象であり，中部地方域では，主として北陸に分布する。

(5)愛知県域では，老・少年層ともに，「イカナンダ」が盛んである。

(6)中部地方域および愛知県域では，共通語事象の「イカナカッタ」の分布は，少ない。他方，新しい「イカンカッタ」は，盛んに行なわれている。

(7)愛知県域での少年層で分布のふえている「イカンダッタ」は，「イカンダ」と「イカンカッタ」との混淆，「イカナンダ」と「イカンカッタ」との混淆，あるいは「イカンダ」と「タ」との結合によって生じたものであろう。これは新しい創生事象とされる。

(8)尾張北部での打消過去表現の形式は，「イケ～」が特色であり，三河や知多のは，「イキャ～」が特色とされる。この傾向は，しだいに強化されてきている。

〔付　記〕

本稿は，第6回広島方言研究所ゼミナール（1977, 7, 30）で，口答発表した草稿を，補訂したものです。その際，藤原与一先生および諸学兄から適切なご教示をたまわりました。ここに記して感謝申しあげます。

On 'Negative-Past' Expressions in the Dialects of the Chūbu Area in Japan

Yoshio EBATA

In this paper, I make it my chief aim to throw a light on the actual conditions of 'Negative-Past' expressions found in the dialects of the Chūbu Area of Japan.

I followed the principles of linguistic geography studing among the old people and the youth of the Chūbu Area 1976, in Aichi Prefecture between 1966 and 1968. I had investigated, on the other hand, the dialectal data in the various areas of Japan between 1963 and 1976.

The results obtained by this study are as follows :

1) The borderline between the east dialect and the west dialect in Japan that concerns the opposition of 'ikananda' and 'ikanakatta' has not moved much for 70 years since KŌGOHŌBUNPUZU was published in 1906. An unchangeable character of the Negative-Past expressions as a grammatical phenomenon may be considered as firm as that of an accentual phenomenon is.

2) The extensive distributions of 'ikananda' found in the dialects of the Chūbu Area in 1976 are very similar to those of the KŌGOHŌBUNPUZU in 1906 were. In the eastern parts of Yamanashi Prefecture, however, we can not recognize the distributions of 'ikananda' now. The distributions of 'ikanakatta' are becoming wider than those of 'ikananda'.

3) The old 'ikanaikke' and 'ikanokke' are now found only in the middle parts of Shizuoka Prefecture.

4) The expression 'ikanda', found in the Hokuriku Area, is recognized as a comparatively new expression derived form 'ikananda'.

5) 'Ikandatta', found in Aichi Prefecture, is increasing in its distributions. Their generative routes may be three.

(1) The first is the mixture of 'ikanda' and 'ikankatta'.

(2) The second is the mixture of 'ikananda' and 'ikankatta'.

(3) The last is the combination of 'ikanda' and 'ta'.

6) The contrast of the negative form of 'ike～' and that of 'ikya～' in Aichi Prefecture is recognized remarkably in the following parts: the former is recognized in the Northern part of the Owari Area, and the latter, in Chita Peninsula and Mikawa Area. This tendency is being strengthened gradually remarkable.